関係主体の環境計画及び本市の状況

＜国＞第六次環境基本計画（2024-2030）

＜ポイント＞

■目的

「環境保全」を通じた、「現在及び将来の国民一人一人の生活の質、幸福度、ウェルビーイング、経済厚生の上昇」（環境・経済・社会の統合的向上の共通した上位の目的として設定）

■方針

「ウェルビーイング／高い生活の質」を最上位に置いた「新たな成長」を実現するため、6つの視点（ストック重視、長期的視点重視、本質的ニーズ重視、無形資産重視、コミュニティ重視、自立・分散型の追求）を提示

■ウェルビーイングの考え方

人々の幸福（ウェルビーイング）を実現するための経済社会活動は自然資本（環境）の基盤の上に成立しており、これまでの大量生産大量消費から、環境収容力を超えない経済・社会の発展にシフトすることで将来の人々の幸福度も維持していこうとする考え方。

＜関西＞関西広域環境保全計画（2026-2028）

＜次期関西広域環境保全計画策定に向けたポイント＞

■目標案

「地域環境・地球環境問題に対応し、ウェルビーイングを実感できる持続可能な関西」（「新たな成長」の実現に向け、環境・経済・社会の統合的向上の共通した上位の目的として、環境基本法第1条の趣旨も踏まえ「ウェルビーイング／高い生活の質」を設定する。）

＜京都府＞京都府環境基本計画（2020-2030）

＜府環境基本計画中間見直しに向けたポイント＞

■将来像や方向性

社会環境等の変化、R4.12 策定の府総合計画に盛り込まれた新たな観点や府内各地の地域特性、第六次環境基本計画に盛り込まれた新たな観点

■個別の取組

各分野で今後府が取り組むべき事項、府民・事業者アンケート・ヒアリング、委員の御意見

＜京都市＞長期ビジョン（次期京都市基本計画）（2025-2050）

＜長期ビジョン策定に向けたポイント＞

■京都市のこれから

自然への畏敬と感謝を抱けるまち

「持続可能な開発」が提唱され、自然体験の需要も世界的に高まる中で、京都市においては、自然を開発や消費の対象として客体化してきた過去数世紀の姿勢そのものを問うていく。自然環境それ自体の保全と併せて、今後の非西洋圏の興隆も念頭に、人間が本来的に自然の一部であるという自然観/人間観を提示し続けていくことで、京都市と交わる様々な思想圏の人々が自然への畏敬と感謝を発見・確認できるようなまちであり続ける。この際、この自然観/人間観が宿る文化様式と生活様式-景観から建造物、和食や服飾に至るまで-の保全も一体的に推進していく。

＜京都市＞新京都戦略（2024-2027）

＜新京都戦略策定に向けたポイント＞

■策定に当たって（課題、可能性）

- ・地域のつながりが希薄になり、**担い手も不足**。
- ・人と人とのつながりがある稀有なまちであること、暮らしに息づく様々な文化やそれを求めて集まる人や企業など、京都には活かしきれていない**ポテンシャルが数多くある**。
- ・今後の市政運営には、官と民、内と外の垣根を低くし、**多様な主体が交ざり合うこと、グローバルな視点に立って京都のポテンシャルを活かしきる**こと、また、行政資源（ヒト・モノ・カネ）の的確なマネジメントによる戦略的な投資、公共施設・資産のパフォーマンス発揮や公民連携の更なる促進、若手人材の確保・育成など、一層の改革が必要。

■目指すまちの姿

すべての人に「居場所」と「出番」がある「突き抜ける世界都市 京都」

■市政運営の方針

- (1)市民生活第一の徹底 (2)新たな京都を切り拓く！
(3)新しい公共を推進！ (4)市役所・職員が変わる！

■重視する3つの視点

- (1)ひらく 開・拓 (2)きわめる 究・極 (3)つなぐ 継・絆

■政策の基本方針（6つ柱の下、政策を推進）

- 柱1 京都のまちが紡ぐ文化の力を活かし「新たな魅力・価値を創造し続けるまち」
柱2 居場所と出番により、つながり・支え合う「包摂性が高く誰もが生き生きと活躍できるまち」
柱3 京都の伝統・知恵・イノベーションの力により「都市の活力と成長を支える産業が育つまち」
柱4 京都ならではの学びと子育て環境を通して「未来を担う子ども・若者を社会全体で共にはぐくむまち」
柱5 豊かな自然・歴史的景観と地域の魅力を活かした「自然環境と調和する持続可能なまち」
柱6 市民のいのち・暮らしを守る「安心安全で災害に強いレジリエントなまち」

■柱5 豊かな自然・歴史的景観と地域の魅力を活かした「自然環境と調和する持続可能なまち」

温室効果ガス排出量の削減ペースの鈍化傾向、森林・農地の多面的機能の低下といった課題に対応し、豊かな自然・歴史的景観と都市機能の改善・向上が両立する持続可能なまちを目指すため、**脱炭素化・資源循環の推進・生物多様性の保全と回復の一体的実施**、森林・農地の保全・活用・魅力発信、豊かな自然・歴史的景観の保全に取り組む。

また、公共交通の担い手不足やポテンシャルを活かしきれていない地域の存在といった課題に対応するため、持続可能な公共交通の維持と多様な主体との連携によるまちづくりに取り組む。

（現状）

- ・京都市内の約**75%**を占める森林、河川が織りなす豊かな自然は京都の強み。市民の暮らしや生活文

化は、「山紫水明」と称される京都の恵み豊かな自然環境に支えられており、生物多様性はかけがえのない財産

- ・京都議定書採択の地であり、これまでから環境先進都市として、CO₂排出量ゼロに向けて、循環型社会の構築、生物多様性の保全に加え、防災、水質保全など森林・農地の持つ多面的機能を最大限生かす取組を推進
- ・一方で、世界、そして京都でも、人と自然との関わりや、生物の多様性が失われつつあり、京都の生活文化を継承していくことが必要

(リーディングプロジェクト)

「山紫水明の都」ならではの生物多様性・未来継承プロジェクト

- 京都の文化や暮らし・営みを彩ってきた生物多様性の恩恵を共に未来へ引き継ぐため、市民・事業者・観光客の参加により、京都の自然の素晴らしさを身近に感じ、発見し、愛着を深めるプラットフォーム「生きものむすぶ・みんなのミュージアム」を創設。
- みんなで創る仕掛けである「生きもの×京都の魅力」のライブラリー化、ライブラリーのテーマや地域性、共通の興味・課題等につながる方々が交ざり合う場の創出、サポーターによる活動支援により、生物多様性をきっかけに、京都への愛着とまちの魅力を向上。
- 「豊かな脱炭素社会」を実現し、生態系や水、大地・森林など、みんなの財産である自然環境の保全と同時に経済価値を創出するため、サーキュラーエコノミー※1を体現したビジネスモデルの創出やグリーン農業の支援など、循環型の経済活動への移行を促進。

※1 持続可能な形で資源を効率的・循環的に有効利用し、付加価値を生み出す経済の仕組み

<京都市>市政の点検結果

- ・温室効果ガス排出量の削減ペースの鈍化
- ・プラごみ対策をはじめとした、資源循環の一層の推進
- ・生物多様性の保全活動の担い手不足や活動資源の確保
- ・更なる脱炭素化、資源循環の推進、生物多様性の保全・回復の一体的実施の可能性
- ・今後の方向性は、環境・経済・社会の統合的な課題解決による、生活の質の向上、都市の成長